

お便り

POST

## ◇私の「カルチャー・いんふお」◇

「家で亡くなるということ」

谷川健三さんと洋子さん親子のお話です。洋子さんは父親を自宅で介護しています。洋子さんは全盲で、健三さんは末期の肺がんを患っています。NHKスペシャル「大往生 わが家で迎える最期」（2019年）でも、その後の映画『人生をしまう時間（とき）』（2019年 下村幸子監督）でも見た洋子さんは少女のような純真な感じで、老いて寝たきりの父親を介護しているようには見えません。『いのちの終いかた』（下村幸子著 NHK出版 2019年）によると、洋子さんは幼い頃に視力を失うも亡きお母様とお父様にかわいがられて育ち、盲学校で取得したマッサージ技術で父親の体をよく揉んでいました。父親の読む新聞記事を点字翻訳したり、お母様が病に倒れた後は健三さんが妻と娘の面倒を看続けました。そして父親が倒れた後は洋子さんが、親戚に助けられながら食事作り、体の世話もしました。そして最期の時も、「呼びかけても返事がない」と、担当に連絡しました。そしてこの親子の自宅での介護生活を支えたのは埼玉の新店にある堀/内病院の地域医療センターです。父が寒いと欲しがったのに毛布を取り出せず、「私をいじめないで」と泣いたと悔やんで話す洋子さんを、小堀医師は慰めます。「泣いてもいい、一生の付き合いはきれいごとじゃない、いつも通りの自然な形のお別れがいいんです」と。そして洋子さんは、父親と暮らした家に住み続けたい、医学が進んで視力が戻るなら父親が売った車を買戻して両親と行ったお店に買い物に行きたいと話します。小堀先生と健三さんが交わす庭のおいしい百目柿をめぐる会話も温かく心に残ります。

参考：小堀嶋一郎『死を生きた人びと』（みすず書房 2018年） (AK)

## ◆研究論文を募集します◆

ピアレビュー（査読）の上、掲載します。

本誌の巻末、横書き部分の「探究」ページに掲載する論文を募集します。

【テーマ】子ども、保育、幼児教育に関するもの

【文字数等】12,500～13,000字程度（日本語）。

（写真・図表、文献、注を含む）

本文はワード原稿で作成してください。編集上適宜対応しますが、投稿予定の方は下記のアドレスまでメールでご相談ください。

【締め切り】随時募集します。

【送付先】本誌編集委員会

Mail : youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

## ◇年間購読継続手続きのお願い◇

いつもご愛読くださり、ありがとうございます。

次号春号からの年間購読を引き続きご希望の方は、更新手続きが必要となります。フレール館のホームページに入り、オンラインショップ「つばめのおうち」のバナーをクリック。その後、「定期購読」⇒「幼児の教育」の表紙絵をクリックします。

定期購読のサイクルは冬号で一区切りになります。ご不明の点などございましたら、youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp までお問い合わせください。

おかげさまで今年も無事に4号をお届けすることができました。今後ともどうぞお引き立てくださいますようお願い申し上げます。

（編集委員会）